

和徳にあった大石を、毎日千人が引いて二日かかって運んでいる。それが現在の本丸入口の鶴の石、亀の石だともいわれているし、猿賀神社の近くのリンゴ畑にある大石は、大光寺城から運ぶ途中でどうにもならなくなったのでそのままになって、現在リンゴ畑にあるのだともいわれている。

このように建築材料を方々から集めてたので、「すべて御普請材木おびただしく、関山より毎日／＼川流し、引きなどつかまつり候、また蔵館山、石川山の辺、切り尽し申す程に候」。このように碓ヶ関山をはじめ平川の流域の山々の立木を伐り出し、現在の境関の辺で陸上げして、工事現場まで運んでいるのである。

この困難な築城工事も慶長十六年（一六一一年）正月にはほぼ完成に近くなり、町割を行って城下町らしい体裁を作ったのである。そして信枚は五月に新築の城へ移ったのである。

高坂蔵人の争い

津軽藩は南部から独立し、天下を徳川幕府が掌るようになったものの、戦乱時代の風習や藩主と家来の上下関係がはっきり区別がなかったようである。徳川三代將軍家光が「余は生まれながらの將軍であり、父秀忠や祖父家康とは違う」と諸大名の前で言い切ったのも、將軍家権力を示し、諸大名と一線を画すことのためである。

津軽藩に至っては、四代信政が江戸から津軽に下向した時、津軽の藩士が新しい殿様がお出になったといつて、殿様のお駕籠の簾を上げてのぞき込むという不作法が平気でなされたのである。

まして、信枚の相続問題でも、家来が公儀に直訴が行われてあった頃の藩主信枚と家来の関係、特に信枚の相

第一章 江戸時代初期までの概略

続のために尽力した高坂蔵人と藩主との上下の関係の差は、形式の上では上下ではあったろうが、高坂蔵人にしては、俺が藩主にしてやったという心があったと思っただろうし、その事については他の家来も認め、高坂蔵人の陰の力に靡びいていた人々が多かったと思う。『津軽一統誌』によれば、高坂は日頃情深く人を愛したと
いっているのを見ると、腕力だけ強いのでなく、人情も厚い人であったと思うのである。

この高坂蔵人と藩主信枚とが、一夜の小姓の行動についてのいさかいから、「二十七日、高岡城内訶アリ」という大事件が発生するのである。

慶長十七年（一六一二年）二月二七日の出来ごとである。女人禁制の寺院や、戦乱のため戦場に女性を連れて行かない戦国時代には、若い男性が可愛がられていたのである。衆道（しゅうどう男色）の対象になったのである。藩主の信枚の可愛い小姓であった八木橋専太郎を、高坂蔵人がちょっと拝借したのが信枚にわかって、大事件に発展するのである。

九里武兵衛が、不断から高坂蔵人が八木橋専太郎に大変に心を寄せているので、九里武兵衛にとっては重臣である高坂蔵人に少しでも気に入られなくて一計を案じて行ったことである。

八木橋専太郎に九里武兵衛が、今日自宅で風呂を焚くので自宅に来るようにと誘うのである。何にも知らない専太郎が武兵衛宅に行ったのであるが、運悪くその日に、藩主信枚が御小姓部屋に立寄ったところ、最愛の小姓である専太郎が居ないので、何処へ行ったか尋ねたのである。不断から藩主信枚に一方的に可愛がられているので、他の小姓たちは専太郎に対して悪意をもっていたし、嫉妬心をも持っていたので、好機到来とばかり藩主信枚に、実は九里武兵衛宅で八木橋専太郎が重臣高坂蔵人と密会中であると申し上げたのである。その話を聞いて信枚は、専太郎に登城を申し付けるが、九里武兵衛や高坂蔵人たちの言葉に左右されて使者が帰されたので、信

枚が三回目の使者を遣したので、とうとう専太郎が登城したものの、立腹した信枚はその場で手打ちという仕打ちを行ったのである。

驚いたのは九里武兵衛である。高坂藏人の機嫌を取るためにした事が、このような極刑された専太郎もさる事ながら、手引きした自分もどのようにされるかわからないので、寺に逃げ込んで助命嘆願をしたものの、信枚の怒りは解けず、とうとう三月三日に検使役河口又左衛門立会いのもとに切腹させられてしまうのである。

高坂藏人については、信枚の跡目相続について、大熊君の支持派に対して陰に陽に押え、その後大光寺城に立て籠る反対派をば武力で排除して、信枚の跡目相続を安定させた大功労者であったので、信枚も家来の諫めを聞いてしばらくはじっとしていたのであるが、高坂藏人に対して事々に冷遇する態度を信枚が示したのである。

高坂藏人は九里武兵衛、八木橋専太郎の二人がそれぞれ落命した事に憤りを持っていたが、自分にも罪があったと恥入っていたのであったが、度々の信枚の嫌がらせ的な態度に、今までの功労者を一時の怒りにまかせてこの様な仕打ちをしなくても良いのではないか、その上自分だけ生き長らえて津輕に居る事は世間に対しても恥しい限りである。今まで津輕に対して忠誠をして来たが、志を変えて南部に仕えて出なおそうと考え、南部へ密かに打診をしたところ、南部では「高坂ほどの豪の者ならば、二倍の知行で召し抱えよう、さっそく立ち退いて来い」との返事に、高坂は一族郎党を引き連れ津輕を去る決心すると共に、志を同じくする人々を集めるのである。この高坂藏人に従う人々は意外に多いのである。そして、立ち退きの期日を六月二十日と決めて、碓ヶ関口より立ち去る事にするのである。

ところが、碓ヶ関に住んでいた岩崎孫兵衛もその一味であったが、心変わりして同行の連判状の下書を持って弘前に居た重臣乾四郎兵衛へ六月十九日の夜に知らせたのである。乾四郎兵衛は事の重大さに驚いて、夜中である

第一章 江戸時代初期までの概略

が即刻登城して信枚に申し上げてその対応策を協議するのである。又山口瀬兵衛（白取とも）も、高坂蔵人の集団脱藩について申し上げている。

協議の結果、高坂蔵人は無双の剛強の人であるから、必ず明朝には暇の挨拶に登城して来る。その時広間で討ち取るのがよからう。その討ち取る人は、竹森六之助、兼平源助、服部孫助、東海吉兵衛の四人に決定し、その他、夜のうちにそれぞれの部処で待機するのである。

この頃には「武家諸法度」が制定され、武士は一人でも脱藩することは禁じられているのである。また津軽藩から見ると敵とも言うべき南部藩に脱藩するのであるから、差止められることは間違いないのである。このような事から考えても、高坂蔵人は戦乱時代に生きた古い感覚の持ち主であり、幕藩体制の確立されようとする過渡期の犠牲者とも考えられるのである。高坂蔵人が明朝登城すると殺害されるという事を耳にした妻が、驚いて主人である蔵人に伝えたら、蔵人は「卑怯な事はできぬ」と言ったとも伝えられている事から見ても察しられるのである。

翌朝、高坂蔵人は登城して大広間に来ると、東海吉兵衛が出て来て高坂蔵人の家来を別の方へ案内して、高坂蔵人を一人にしてしまうのである。そして高坂蔵人がいつものように奥の番所へ入ろうとするところを、兼平源助が「高坂蔵人殿」と声を懸けたので、高坂蔵人が何事かと心を許した隙に組み付いたのである。続いて竹森も組み付いたが、強力の高坂蔵人は二人に組み付かれながらも、刀を抜いて駆け出して玄関へ移動したのであるが、服部孫助が体の自由を奪われた高坂蔵人に一太刀を浴びせるのである。しかし、高坂蔵人はなおもひるまず戦うのであるが、三人に打ち取られてしまうのである。

高坂蔵人の妻は、夫が城中で殺害された事を知ると、現在の下乗橋の向い筋の内東門の石橋附近に家屋があっ

たので、城中に居ては申しわけないといって百石町の下屋敷に帰って、二十一日に自宅に放火して城の近い馬屋町の空家に入り、城中に鉄砲を打って捕手と戦って斬殺されてしまうのである。

一方、高坂蔵人と行動を共にしようとする人々のまとめ役は奥寺孫四郎であった。この孫四郎は槍の名人ともいわれた人であったが、碓ヶ関村の清右衛門に討ち殺されてしまうのである。初めは湯口孫三郎といったのが、後に白戸の姓を名乗るのである。信枚が白戸清右衛門に感状を与えているのであるが、この奥寺はもと浪岡の重臣であったとも、脱藩の総大将でもあるところから見ると一族であったとも、思われるのである。

この企てに賛同した人々で処刑された人々は、『平山日記』によると、人数が千人余りの首を取ってやっと藩内が落ち着いたと書かれている。

感状の文は次のようになっている。

「奥寺孫四郎走候処、孫蔵同然追懸討留

其働不斜候為、勲功加増廿石肝煎跡宛

行之候者也

慶長十七子年六月廿一日

信牧公御墨印

白戸清右衛門 かたへ」

この高坂蔵人の事件で津輕藩にいた武士が半減し、古くからの功臣の家が断絶したので、後に旧臣の跡をただして小知行として再び召抱えたようである。

高坂の事件について、後年北川仁兵衛の覚書によると、色々と碓ヶ関の事が書かれている。

第一章 江戸時代初期までの概略

「源兵衛（岩崎）が話しているのであるが、其の頃（慶長十七年頃）、岩崎源兵衛が扶持を受けながら碓ヶ関の遠見番を仰せ付けられていました。その後九郎津殿（高坂藏人か）が古館に居た時、南部へ心変わりました。その時碓ヶ関の御番人は孫四郎殿と喜与助殿が勤務しておりました。

九郎津殿から右御番所へ手紙が来まして、このたび古掛（古懸）に来ること、殿様と話し合いがついたので、古掛から南部へ皆んなを連れて行きたいという手紙の内容であった。その内容の手紙を孫四郎殿が読んでいた時であったので、ちらりと岩崎源兵衛が見まして、その手紙はどなたからのものですか、拙者にも読ませてくれと行って読んだのが南部へ引越すという内容であったので、源兵衛が弘前へ参って殿様に申し上げたところ、九郎津殿が打首にされ、その時に源兵衛に百石の知行を下し置きになりました。奥寺孫四郎殿が逃亡致しましたので碓ヶ関村の清右衛門が追い付いて孫四郎殿の首を打ち取り、喜与助殿も逃げましたが、弘前から追駈けて来た者に打ち取られました。それで清右衛門に五十石を下し置きになりました。それから源兵衛は拾八・九年碓ヶ関の御番を勤務致しました」

と外崎源兵衛が話をしている。外崎源兵衛が古懸の古館（大館とも）に住んでいたのを、九郎津に古館を明渡ししているようにも思われる。

九郎津が古館に住んで連絡を取り、『津軽一統誌』では脱藩の大将が奥寺孫四郎であり、碓ヶ関番所には孫四郎が居り、南部との連絡役をも勤めていたと思われる。この事件後、津軽藩士が半減する程であり、一族郎党が大挙の移動であるので、脱藩者の安全を考えると、志を同じくする者が関所を守っているのです、南部に行くのは最も安全と考えられる。

外崎源兵衛の先祖は、碓ヶ関古館（大館）館主であって、外崎孫八が館主で、老臣は大湯弥五郎がいた。この

外崎孫八は瑞祥公（為信諡名）の時代には知行三十石戴き、その外に小知行と碓ヶ関の関所の番人も勤めていたが、為信に仕える前から古館を居館として住んでいたのである。そして為信公の合戦がある時には、加勢の人数をその時に応じて、五十人とか百人とかを出しており、三代迄この古館に住んでいたと外崎氏の由緒書にあるので、四代目がこの源兵衛であるのかも知れない。源兵衛が取立られる以前は、古館の下川原町に番衆の村があつて、そこから碓ヶ関の関所に勤めていたらしいのである。この高坂藏人の事件後に、信枚が城長根を見て、用心のため御番所を建てて番人を岩館村の加茂助、大鰐村久助、新屋村仁部の都合三人に守らせたといっている。

この事から考えて、碓ヶ関の奥寺孫四郎たちの勤めている関所と別に、源兵衛たちの勤めている遠見番所が城長根にあったのではないかと思われる。高坂藏人の事件後、防衛のために城長根を強化したとも考えられる。橋南谿が天明六年（一七八六年）に津軽地方に入って来ているが、その中で、「碓ヶ関の山の小口に城跡あり、大河を前にし、矢倉の跡や或は城門の跡などがはつきりと残っているのが、秋田の飛根に比べると十分の一にも足りない小さなものであるが、此の碓ヶ関は誰れの城跡ですかと碓ヶ関の人々に聞いても、知っている人がいない。ただ、城跡だとばかり覚えていてという答えだけである」と書いてある。『津軽史』の絵図には古城長根と書いてあるし、現在の人々は「しろながれ」といっている。

奥寺孫四郎を討ち取った碓ヶ関村の清右衛門の由緒書によれば、右京亮為信公の時代に仕え、初め先祖の名は湯口孫三郎といって、慶長十四年九月十六日に殿様から戴いたのは高三十石、地所は森山村、新里村、後に白戸清右衛門と名前を替えており、慶長十七年六月二十一日には高二十石、本地として奥寺孫四郎を討ち取った時の御加増分で地所は碓ヶ関村。そして白戸清右衛門尉行増の時に百石御加増となっているが、慶長十四年は大熊君と信枚の相続問題の事件がやっと落着いた時の論功賞であらうと思う。皮肉にもその時の最高殊勲者高坂は、三年

第一章 江戸時代初期までの概略

後に新築の弘前城広間で殺害されている。その時に清右衛門は再び御増加になっている。後に弘前市百石町小路に居宅を構えていたのであるが、故あって碓ヶ関に在宅するようになっていた。白戸治三郎氏がその子孫である。

元和元年（一六一五年）五月、豊臣秀頼の大坂城が落ち、豊臣家は滅亡してしまっているのであるが、戦後の処理として徳川家では諸大名の配置替えや、減封などで幕府の基礎作りを行なうのである。津軽藩は、徳川家とは家康の養女万姫を信枚が正室として迎えている関係上、色々と恩恵に恵まれていたのであるが、天和五年（一六一九年）七月六日に、幕府では津軽家の格式を四万七千石から、川中島へ国替えとして十萬石に格上げすることに内定したのである。

それで津軽は大騒動になるのである。即ち、家中及び町々の居宅の屋根の葺替えや修理などをして、津軽藩はすばらしい所である事を、国替えさせられて来る大名や家来に良い印象を与えようと考えた為めである。引越するるので障子の破れを張替えたり、畳の表替えをする庶民と同じだったのであるが、家来はどうするかで困ったのである。その時に単身でも信枚と行動を共にすると決意表明した人々が八十三名であったので、天和七年三月二日にこれらの人々に知行の百石を与えて武士に取り立てられるのである。その中の一人が碓ヶ関村清右衛門がふくまれ、百石取の武士になるのである。これを八十三騎といっている。

八十三騎については、慶長五年（一六〇〇年）に関ヶ原の戦のため為信が上方に行っている時、石田三成が勝つと信じた尾崎喜蔵、板垣兵部、三目内玄蕃の三人は堀越城で反乱を起したのである。留守居の今小三郎、木村越後の働きによりそれらを鎮圧したのであるが、為信が津軽に帰った時に御増加及び御褒美を与えているのである。この時の人々も八十三騎であった。

また、天和二年（一六一六年）は春より天候不順で、凶作のための死人が山になったので、餓飢山といった程

の年で、前年の天和元年も凶作であったので、二年連続の大凶作のため殿様も蔵の根餅を食べて米飯することができなかったのである。

その時、津軽地方で代々作り伝えられてあった赤穂という穀で稲作をした人々の田圃では良く稲が稔ったのでその米を差上げた人々に御褒美として知行を与えている。この人々を赤穂八十三騎と言っているのである。このように、八十三騎という称号がたび／＼津軽藩では使用したようである。

元和三年（一六一七年）十月十九日に、津軽越中守信枚が参勤のため、秋田土崎港に宿泊していた時の事である。使者を秋田藩主に遣して、実は津軽藩士であった奥寺右馬之允は義理人情もなく妻子を殺害した上、津軽から逃亡したが、今回秋田領の郊外に隠れているので討ち取りたいので許可願いたいとの申し入れがあったのである。そこで藩主は許可をしたばかりか、家来を夜のうちに遣わしている。

この奥寺右馬之允（奥寺右馬丞）は南部藩士であったが津軽家に復讐しようと、密かに津軽藩に仕え大光寺城にいた。大熊君のもとに居たのである。しかも信枚を殺害しようとその隙を狙っていたのである。

ある夜、信枚の寝室に近づき、襖の陰から槍を突き刺したのであったが、ちょうど信枚が寝返りを打ったために仕損じてしまったので、暗殺発覚を恐れ夜のうちに家に帰り、妻子を殺し、倅一人を引連れて逃亡するのであるが、追手の者を鉄砲で討殺して南部へ去ってしまうのである。しかし恨み深く碓ヶ関山に隠れて、三度も信枚を狙撃したが成功しなかったのである。『平山日記』では、剣ヶ坂（宿川原）で鉄砲を打ち損じたと書いている。右馬之允は鉄砲の腕には自信があったが、目的を果さず南部藩に仕えるのである。

津軽藩として面目にかけても右馬之允を亡き者にしようと、碓ヶ関町同心岩崎金右衛門を密かに南部へ忍び込ませるのには成功はするものの、本人を討ち取る事もなく岩崎金右衛門が碓ヶ関町に帰って来るのである。目的

を遂行できない金石衛門は、知行百石召上げられ浪人になってしまふのである。この先祖は岩崎源兵衛かどうか。

矢立の杉と峠

矢立の杉について、菅江真澄が筆のまにまにの中に次のように書いている。

「今、津軽と秋田の国ざかい、折箸山（また折橋山ともいう、同名南比内十二所にもあり）に、大昔、大変に偉大という程の大きい杉の木があった。此の杉の木はいわれのある杉の木である。ある古い本に次の様に書きしるされている。——五十七代の陽成天皇の御代元慶二年（八七八年）大館城主は公家（きみいへ）と言う人が住んでいた。元慶四年（八八〇年）に隕の関の近辺に、橋吉明（たちばなよしあき）という人が城を築いて住んでいたので、元慶四年五月十四日に公家が津軽へ軍を進めて橋吉明を討ち取り、大館へ兵を引き上げる時に、大杉の下に弓一張と征矢一雙を立て納めて置いて帰ったので矢立の杉というようになった——と大館の古い本に書いてあったので誌す」と書いている。

元慶二年三月に秋田の蝦夷の大反乱があつて、元慶三年（八七九年）の六月になつて鎮圧して平静になつてゐる。当時の政府が藤原保則（ふさのり）を出羽権守（でわのけんかみ）に任命し、小野春風（はるなづ）を鎮守將軍、坂上好蔭（よしかげ）を陸奥権介（むつごんのすけ）（田村麻呂の曾孫）を派遣し、陸奥国や上野・下野国（しもふ）からはもちろん、東海・東山からも援軍の出動準備をさせたのである。それは津軽の蝦夷が南下しようとしたためである。三代実録によれば、津軽の蝦夷が行動をすれば、大軍をもって攻めても攻めきれないといつてゐる。そして「津軽夷俘は党派が多くて何千人あるか知らない。生まれながらにして勇猛で、毎日の生活が軍事訓練である。もしもこの津軽の蝦夷の軍隊が攻めて来ると防ぐことはできない」とい